

IV-14 SU 剤およびインスリン治療における DPP-4 阻害薬併用の
有効性
○川原 昌之
(青森労災病院 糖尿病・内分泌内科)

【背景】糖尿病治療の最終目標は、良質な血糖管理にて合併症の発症・進展を予防し、健常人と変わらない QOL を維持することである。一方、従来の SU 剤やインスリンを中心とした治療では、体重増加や血糖変動の増大を来し易く、高インスリン血症による心血管疾患の発症も懸念される。2009 年末に登場した DPP-4 阻害薬は、血糖依存性のインスリン分泌促進とグルカゴン分泌抑制作用により血糖変動を縮小し得ることから、良質な血糖管理に大きく貢献できる可能性がある。【対象と方法】当科外来で SU 剤およびインスリンにて治療を行っている 2 型糖尿病患者のうち、2012 年 7 月から半年間にシタグリブチン（以下 Sita）を新規に併用開始した 137 例（SU 剤への併用（以下 S 群）38 例；男女 21/17, 70.2±8.3 歳, BMI 25.0±4.5 kg/m²、インスリンへの併用（以下 I 群）99 例；男女 41/58, 67.3±11.1 歳, BMI 26.5±4.7 kg/m²）について有効性を検討した。全例で同薬併用と同時に SU 剤およびインスリンを減量した。Sita の用量は上限 50mg とした。SU 剤はグリメピリド換算とした。【結果】S 群では SU 剤を 86% 減量（22 例で中止）、I 群ではインスリンを 59% 減量（27 例で中止）したが、メトホルミンの追加・増量効果も加わり、12 か月後の HbA1c は各々 0.7% 改善した（7.5±1.1→6.8±0.5、7.8±1.3→7.1±1.0）。HbA1c 0.5% 以上悪化例は、S 群で 0%、I 群で 7% のみであった。SU 剤ないしインスリン中止例では、非中止例に比べて年齢と HbA1c が低く、BMI とメトホルミン使用率が高く、Sita 併用時の SU 剤ないしインスリン量が少なかった（0.97 vs 2.44 mg/日、19.4 vs 31.2 単位/日）。インスリン減量が 50% 以上の群（n=64、以下 A 群）では、50% 未満の群（n=35）に比べて BMI とメトホルミン使用率が高く、HbA1c の改善が大きかった（7.6→6.9% vs 7.8→7.5%）。A 群において、BMI 30 以上と 30 未満の群では、両群ともインスリンを約 75% 減量したが、12 か月後の HbA1c に差異を認めた（7.3 vs 6.8%）。【考察】DPP-4 阻害薬は DPP-4 によるインクレチン（GLP-1, GIP）の分解を抑制し、メトホルミンはインクレチンの分泌を促進する作用があることから、両者の相加的効果により SU 剤やインスリンを大幅に減量できたものと考えられる。【結語】DPP-4 阻害薬を中心とした治療は、良質な血糖管理のために有用である。